

看護基礎教育1年次における シミュレーション教育プログラムの学習効果

－自己評価および振り返りレポート分析の結果から－

Learning effect of simulation education program
in nursing basic education first year

－ From the results of self-evaluation and reflection report analysis －

下川原久子
久保 宣子

小沢久美子
蛭田 由美

看護基礎教育1年次における シミュレーション教育プログラムの学習効果 ー自己評価および振り返りレポート分析の結果からー

下川原久子 小沢久美子
久保 宣子 蛭田 由美

I. はじめに

近年の医療は著しい発展を遂げており、さらに社会のニーズに影響を受けている。看護の変遷も例外ではなく、日々進歩し続ける医療に更なる知識と技術が求められている。しかし、高度な医療や複雑な機器の扱いなど、知識もさることながら確かな技術と共に医療従事者としての責任を果たすことは困難となっている。看護実践能力については、看護師の入職後のリアリティショックの要因の一つとして挙げられ、その要因は「知識の不足」「技術の不足」が背景にあるとしている¹⁾。一方、看護基礎教育においては医療現場が求める看護技術のレベルに達しておらず、2005年日本看護協会の調査報告²⁾や2015年の先行研究³⁾においてもその乖離が課題となっている昨今である。2011年厚生労働省⁴⁾では、「看護師に求められる実践能力を育成するための教育方法」として、講義・演習・実習の効果的な組み合わせを求めているが、学内で行うシミュレーション教育によって効果的な技術の習得が実習の準備となり得ることを謳っている。さらに、教授方法は明確化されているが学生側には看護技術目標への達成度に達していないこともあり、シミュレーション教育の必要性を課題としている研究もある⁵⁾。このようにシミュレーション教育には効果もあるが課題もある教育方法であり、今後ますますシミュレーション教育は検討され拡大されていく分野である。

本学では、シミュレーション教育を行うための全身モデル（以下シミュレーションモデルとする）を1年次に導入し2年が経過した。1年次には、フィジカルアセスメントの科目において、「患者把握のために必要な基礎看護技術を習得する」ことを目的に導入している。シミュレーションモデルにおいて看護技術習得のための観察の視点を理解し実践する一連の流れを体験することは、患者の理解に必要な基礎知識の確認ができ、体験が自信へとつながり主体的な行動へと変容できることが予想される。本研究では、シミュレーションモデルを使用したプログラムに学生の自己評価の活用を加えることで、看護の対象の理解の方法、観察の視点の明確化が期待できると推測した。自己評価は自己教育に結びつくという点で重要な機能をもっており、自発的・自立的に行われるために効果が高いとされている⁶⁾。本研究では、シミュレーション教育の学習目標「自己評価」と学生の振り返りレポートから、学習効果について検討したいと考えた。

II. 研究目的

看護基礎教育1年次のシミュレーション教育に対する学生の振り返りの実態を把握することにより、シミュレーション教育プログラムの学習効果を検討する。

Ⅲ. 研究方法

1. 研究デザイン：量的・質的研究デザイン
2. 研究対象：A大学看護学生1年次70名（95.9%）（同意者および出席者）
3. 研究内容：本研究は学習目標自己評価・学生の振り返りレポートの提出物70件（95.9%）から成る。

- 1) 学習目標自己評価：シミュレーション教育プログラムの自己評価は3つの構成で「学習目標理解」「事前課題」「シミュレーション」とし、それぞれの目標構成要素はプログラムの内容として50項目で構成される。本研究においては「シミュレーション」を中心とした自己評価を、以下17項目「学習目標理解①～⑥」、「事前課題⑦⑧」、「シミュレーション⑨～⑰」とした。

①学習目標の理解ができた（学習目標理解）、②問診と診察ができた（問診・診察）、③アセスメントと報告・記録ができた（報告・記録）、④課題が明確になった（課題の明確化）、⑤事前に援助方法を考えた（シミュレーション前熟考）、⑥実践中に援助方法を考えた（シミュレーション中熟考）、⑦事前学習の内容についてグループ学習、デブリーフィングができた（グループ学習）、⑧フィジカルアセスメント展開個人用を行った（個人課題）⑨シミュレーションの時間配分は適切だった（シミュレーション時間配分）、⑩シナリオが計画通りにできた（シナリオの実施）、⑪シナリオ実施で知識が不足した（知識）、⑫シナリオ実施で技術が不足した（技術）、⑬シナリオ実施で態度が不足した（態度）、⑭事前にグループで役割遂行ができた（役割遂行（前）、⑮実践中グループで役割遂行ができた（役割遂行（中）、⑯事前に事例の観察項目をあげることができた（事例前観察）、⑰実践中に事例の観察項目をあげることができた（事例中観察）

- 2) シミュレーション後の振り返りレポート：振り返りとして「シミュレーションの学び」を内容として、約15行程度に記載するよう指定した。
- 3) シミュレーション日程：シミュレーション教育プログラムの一環として、シミュレーションを実施し、報告と振り返りまでを実施した。その目的は「患者把握のために必要な基礎看護技術を習得する」である。シミュレーションの展開においてはシナリオの事例を計画した。1グループを4～6人とした。シナリオの事例は、3事例（心不全、肺気腫、肺炎）としグループに1事例を分担した。それぞれのグループが事例を元に事前学習、シナリオ計画、シミュレーションを実施し報告した。シミュレーションの視点は、①視診・問診、②触診、打診、③聴診（肺音、心音、腸音）とその他の観察である。

4) 基礎看護学関連科目の既修状況

解剖生理学Ⅰ、看護学概論、日常生活援助論、基礎看護学実習Ⅰ

4. 研究期間：平成30年9～12月、1年次秋学期、ヘルスアセスメント、回復促進援助論、授業後の一環として行う。

5. 分析方法：

- 1) シミュレーションにおける学習目標自己評価から目標達成状況の把握

学習目標自己評価はシナリオ作成と教育技法⁷⁾の教授法から演習要項に沿って変法し、オリジナルに作成した。また、自己評価は、「シミュレーション」を中心とした学習目標構成要素17項目を比較検討した。

自己評価点は4段階「4:よくできた/3:まあまあできた/2:あまりできなかった/1:できなかった」とした。分析は(1)17項目を自己評価4段階で統計記述での平均値で比較した。(2)17項目をカイ二乗検定において、自己評価点の4段階をさらに「4・3」をA群:できる群、「2・1」をB群:できない群とし比較した。(3)「(2)」の比較後に有意な差のある項目に新たにA群を「2」、B群を「1」として再編集し1サンプルのカイ二乗検定にて比較した。(4)A群:できる群・B群:できない群の実践の「前・中」の2項目間「⑤⑥」「⑬⑭」「⑯⑰」は、Wilcoxon符号順位検定にて比較した。統計処理は、いずれもSPSS19.0を使用し、5%未満を有意水準とした。

2)「学生振り返り」レポートの内容分析

テキストマイニング(株式会社NTTデータ数理システムText Mailing Studio TMS6.1)から、意味のある語彙に着目し、単語出現頻度、品詞、類義語、共起語、係り受けなどの抽出された情報をもとにカテゴリ化し、学びの特徴や傾向を見出した。レポート内容の条件は<目標達成状況><課題・方向性>共に、総行数、単語種別から上位20件を抽出した。単語頻度は単語頻度5回以上、行中に現れる重複語単語は1カウントした。また、カテゴリは1つのコードごとに整理されているカテゴリのチェック表からサブカテゴリとキーポイントを抽出し、オリジナルに作成した(表4、表5)。カテゴリを作成するにあたり、文章を「目標達成状況」と「課題・方向性」の2種類に区別した。

3) シミュレーション関連先行研究分析

医中誌Web版を用い、キーワードは「シミュレーション」「看護」「学生」として抽出した。国内過去10年間で22件がヒットした。22件からキーワードに沿い、さらに本研究の主旨に沿ったプログラムの検討・考察を要約している抄録4件を厳選し、研究の傾向を考察した。

6. 研究上の倫理的配慮

- ①八戸学院大学・八戸学院大学短期大学部研究倫理委員会により承認を受けた。承認番号18-12。
- ②研究対象者の人権に関する配慮についてまた、研究の主旨について概要説明文や研究参加同意書・研究参加同意撤回書を授業の始まる前に配布し、出席者全員に説明した。その後、研究参加同意書をその場で回収した。

IV. 結 果

1. 自己評価の「学習目標達成状況」

学習目標構成要素17項目の平均値(表1)3.0以上は7項目で「③報告・記録」「④課題の明確化」「⑤シミュレーション前熟考」「⑦グループ学習」「⑧個人課題」「⑭役割遂行(前)」⑯事例前観察」であった。平均値3.0以下は10項目で「①学習目標理解」「②問診・診察」「⑥シミュレーション中熟考」「⑨シミュレーション時間配分」「⑩シナリオの実施」「⑪知識不足」「⑫技術不足」「⑬態度不足」「⑮役割遂行(中)」⑰事例中観察」であった。

各1項目間のA群:できる群(以降A群とする)・B群:できない群(以降B群とする)比較(表2)は11項目(実践の前・中の比較④⑤・⑭⑮・⑯⑰は除く)について、カイ二乗検定の結果2項目「⑨シミュレーション時間配分」「⑫技術不足」は有意な差はなかった($p < .05$)。有意な差がみられたのは9項目で「①学習目標理解」「②問診・診察」「③報告・記録」「④課題の明確化」「⑦グループ学習」「⑧個人課題」「⑩シナリオの実施」「⑪知識不足」「⑬態度不足」であった

($p < .05$)。これら、有意な差のあった9項目については自己評価の4段階から「A群」「B群」の2段階に再編集し1サンプル2項のカイ二乗検定にて比較した結果、全てに有意な差がみられた($p < .05$)。

「A群」「B群」の大きさの比較について、A群が多かったのは「①学習目標理解」「②問診・視診」「③記録報告」「④課題明確化」「⑩シナリオ実施」「⑬態度不足」であった($p < .05$)。B群が多かったのは「⑪知識」の不足であった。有意な差みられないのは「⑨シミュレーション時間配分」「⑫技術不足」であった($p < .05$)。

「⑤⑥シミュレーション熟考(前)・(中)」「⑭⑮役割(前)・(中)」「⑯⑰事例(前)・(中)」のそれぞれ2項目間の比較はWilcoxon符号付き順位検定(表3)の結果、全てに有意な差がみられた($p < .05$)。それぞれの大きさは「⑤シミュレーション熟考(前)>⑥シミュレーション熟考(中)」
「⑭役割(前)>⑮役割(中)」
「⑯事例(前)>⑰事例(中)」であった($p < .05$)。

2. 振り返りの状況

1) 学習目標達成状況(カテゴリー化)

総行数387行(男40行10.34%、女347行89.66%)、単語種別946種から振り返りレポートの<単語頻出>(図1)は以下の上位20項目(思う、患者、行う、問診、良い、感じる、バイタルサイン測定、考える、聴診、必要、忘れる、大切、時間、確認、聞く、視診、心音、報告、グループ、音)が抽出された。<係り受け>は総数102で、種別16(大切—思う、必要—思う、バイタルサイン測定—行う、時間—かかる、必要—感じる、気—つける+したい、肺炎—患者、良い—思う、確認—忘れる、患者—与える、患者—前、主—看護師、心音—肺音、SPO2—測定、身—つける、患者—状態)が抽出された。

目標達成状況のカテゴリ(表4)は、【患者】【良い】【バイタルサイン測定】【必要】【大切】【時間】【確認】【心音】の8コードであった。カテゴリとそのサブカテゴリとキーポイントは内容を熟考しオリジナルに追加し作成した。さらに、目標達成状況<ことばネットワーク(係り受け)>(図2)が抽出された。<ことばネットワーク(係り受け)>の上位3項目は「思う」「患者」「問診」が中心の単語となっていた。「思う」は、“大切、勉強、復習、自分、優先順位、理解、身”が一方向で結びついていた。「患者」は“目線、合わせる、寝たきり、状態”、が一方向で結びついていた。「問診」は、“質問、内容”が一方向で結びついていた。

2) 課題・方向性

総行数78行(男23行29.49%、女55行70.51%)、単語種別369種から上位20件を抽出した。単語頻出(図3)は以下の20項目(思う、患者、問診、知識、復習、良い、看護師、学ぶ、バイタルサイン測定、情報、身、自分、つける、行う、実習、感じる、演習、大切、状態、必要)であった。係り受け頻度(2回以上)は種別6項目(バイタルサイン測定—行う、学習—思う、楽—思う、観察—良い、測定—良い、名前—聞く)が抽出された。

カテゴリは7コード、【良い】【行う】【観察】【分かる+ない】【名前】【点】【学習】であった。カテゴリとそのサブカテゴリとキーポイント(表5)は内容を熟考しオリジナルに作成した結果(表5)、単語頻出の上位に位置した「思う」の概要は“復習・学習の必要性”、“確認から安全性へ”、“分かりやすい話し方の必要性”、“技術の向上”などで表現されていた。さらに、「課題・方向性」の<ことばネットワーク(係り受け)>(図4)が抽出された。これによると、カテゴリ【良い】に対して【学習】【名前】【分かる+ない】【観察】が一方向で関連していた。

看護基礎教育1年次におけるシミュレーション教育プログラムの学習効果
－自己評価および振り返りレポート分析の結果から－

表1. 学習目標構成要素の平均値と実施前・中の比較の結果

	学習目標構成要素	N	平均値	A群・B群or事前・実践中比較
学習目標理解	①学習目標の理解ができた(学習目標理解)	68	2.99	B<A
	②問診と診察ができた(問診・診察)	63	2.89	B<A
	③アセスメントと報告・記録ができた(報告・記録)	57	3.21	B<A
	④課題が明確になった(課題の明確化)	59	3.41	B<A
	⑤事前に援助方法を考えた(シミュレーション熟考(前))	70	3.30	事前>実践中
	⑥実践中に援助方法を考えた(シミュレーション熟考(中))	68	2.81	
課題前	⑦事前学習の内容についてグループ学習、デブリーフィングができた	70	3.26	B<A
	⑧フィジカルアセスメント展開個人用を行った(個人課題)	70	3.33	B<A
シミュレーション	⑨シミュレーションの時間配分は適切だった(シミュレーション時間配分)	70	2.34	B<A
	⑩シナリオが計画通りにできた(シナリオの実施)	70	2.74	B<A
	⑪シナリオ実施で知識が不足した(知識不足)	70	1.26	B>A
	⑫シナリオ実施で技術が不足した(技術不足)	70	1.54	B=A n.s.
	⑬シナリオ実施で態度が不足した(態度不足)	70	1.91	B<A
	⑭事前にグループで役割遂行ができた(役割遂行(前))	68	3.28	事前>実践中
	⑮実践中グループで役割遂行ができた(役割遂行(中))	60	2.92	
	⑯事前に事例の観察項目をあげることができた(事例前観察)	63	3.30	事前>実践中
	⑰実践中に事例の観察項目をあげることができた(事例中観察)	66	2.88	

表2. 学習目標達成状況 A群・B群の比較 *1サンプルX二乗検定 (p<.05)

	学習目標理解				事前学習		シミュレーション				
	学習目標理解	問診と視診	報告・記録	課題明確化	グループ学習	個人課題	シミュレーション時間配分	シナリオの実施	知識不足	技術不足	態度不足
カイ2乗	31.118	15.254	39.724	52.267	47.087	44.800	2.800	6.914	16.514	.514	48.057
自由度	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1	1
漸近有意確率	.000	.000	.000	.000	.000	.000	.094	.009	.000	.473	.000
	*	*	*	*	*	*	n.s.	*	*	n.s.	*

*有意な差がある

表3. シミュレーション前・中の比較 * Wilcoxon符号順位和検定 (p<.05)

	シミュレーション熟考前・中比較	役割遂行前・中比較	事例観察前・中比較
Z	-3.407	-2.971	-3.082
漸近有意確率(両側)	.001	.003	.002

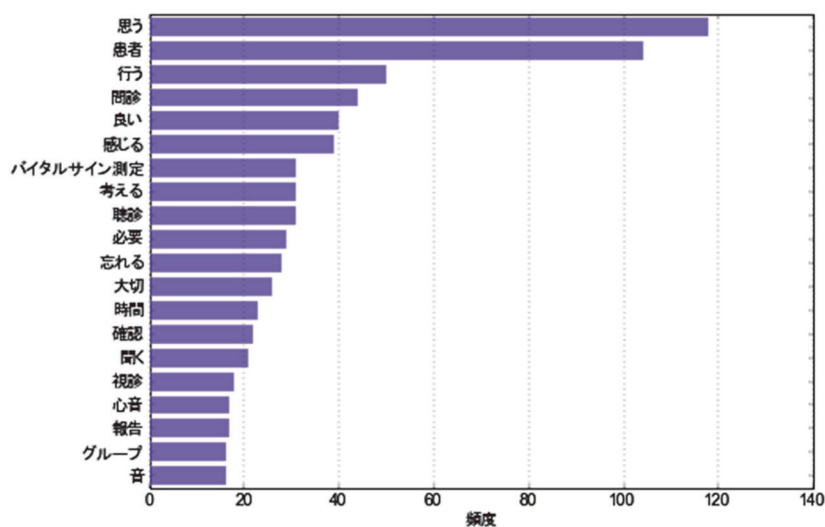


図1. 目標達成状況「単語頻出」

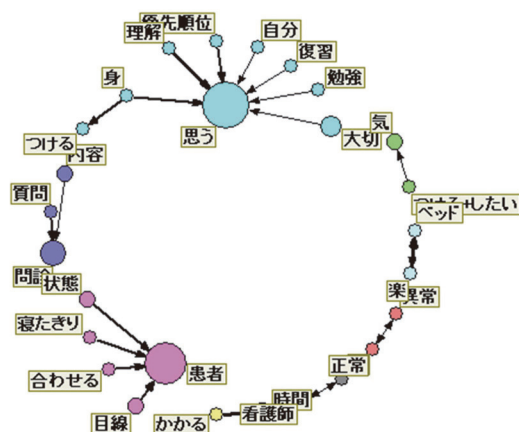


図2. 目標達成状況「ことばネットワーク（係り受け）」

表4. 目標達成状況「カテゴリとキーポイント」

カテゴリ (件数)	サブカテゴリ(件数) * 上位5位	キーポイント
患者(104)	対応(20)	症状と症状の予測、主訴、病床環境、目線、患者の安楽、観察後の対応、装着類の観察と調整
	観察(16)	事例に応じた症状、病態を予測した症状、全身状態、臥床患者の褥瘡、装着類(酸素、点滴、膀胱留置カテーテル)、広い視野
	問診(15)	説明の仕方、話す姿勢、質問の仕方、立ち位置
	技術(15)	観察、バイタルサイン測定、聴診、視診、打診、患者の安楽への対応、接し方の基本、アセスメント
	説明の仕方(7)	専門用語を使わずわかりやすく、声の調子、目線を合わせる、具体的に
良い(40)	学び(20)	分かりやすい説明、役割と役割遂行、体位選択、技術練習の必要性、観察要点の理解、課題遂行、学び直し、時間配分、症状予測、
	グループ学習の効果(4)	不足に気づく、課題の明確化、共通理解に基づく行動
	聴診(3)	部位の確認、音の確認
	氏名確認(3)	誤認の回避、対応への導入
	話し方(3)	具体的な説明、声の調子、声がけ
バイタルサイン測定(31)	方法(19)	測定手順、知識、技術、
	時間配分(6)	一部の不足、一つに対しての時間超過
	観察(3)	観察項目通りの観察、酸素吸入確認の不足、
必要(29)	技術(10)	聴診、バイタルサイン測定、熟練、知識、問診、説明話し方
	情報収集(4)	症状、視診、観察7項目
	観察(4)	必要性のある観察、状態からの予測
	報告(2)	報告の仕方
	時間配分(2)	制限時間内での実施
大切(26)	技術(12)	観察、触診、視診、技術練習、SPO2測定、精神面のコントロール
	時間配分(3)	計画の見直し、手順、スピード
	事前学習(2)	病態
	アセスメント(2)	役割分担、優先順位
	具体的な報告(1)	状態報告
時間(23)	時間不足(12)	報告、聴診、打診、視診、物品操作、優先順位、血圧測定、メンバーの話し合い、患者への苦痛の予測
	時間過剰(6)	問診、橈骨動脈触知、バイタルサイン測定
	時間配分(3)	聴診、触診、バイタルサイン測定、行動
	手技不足(1)	バイタルサイン測定
	優先順位(1)	援助
確認(22)	安楽(1)	体位変換
	基本技術(16)	尿量、輸液の確認、SPO2、浮腫、観察項目、酸素ボンベ確認、バイタルサイン測定、膀胱留置カテーテルの管理、血圧測定、チューブ類の確認、
	準備(1)	個人への対応、診察の仕方
	状態の予測(1)	情報収集と予測
	メンバーの共通理解(1)	計画の確認
	復唱(1)	再確認
心音(17)	音の区別の困難(6)	知識の不足、部位の曖昧さ、聞き分けの困難さ
	判断ができた(5)	事前学習効果
	事例の誤解(3)	聴取のし忘れ
	時間不足(1)	バイタルサイン測定、視診への集中し過ぎ
	患者への配慮不足(1)	音に集中し過ぎ
	学習不足(1)	聞き分けの困難さ

看護基礎教育1年次におけるシミュレーション教育プログラムの学習効果
－自己評価および振り返りレポート分析の結果から－

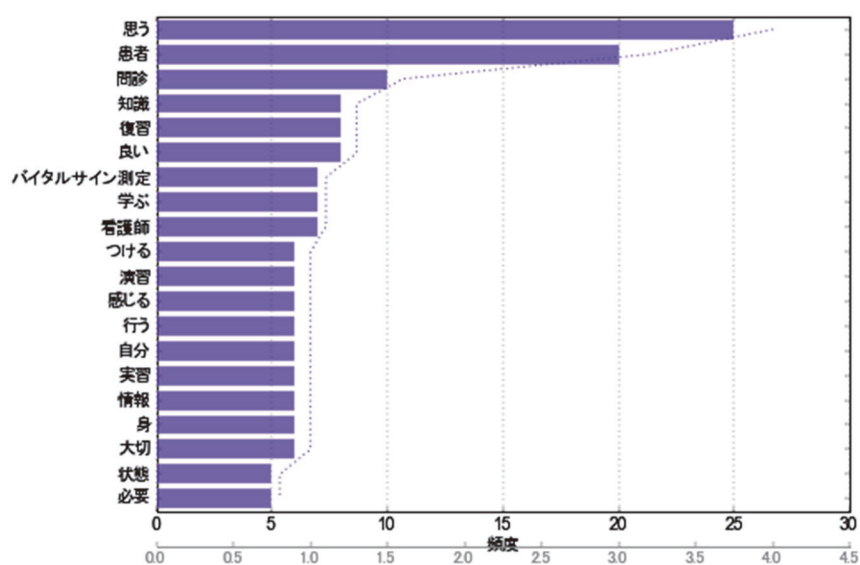


図3. 課題・方向性「単語頻出」

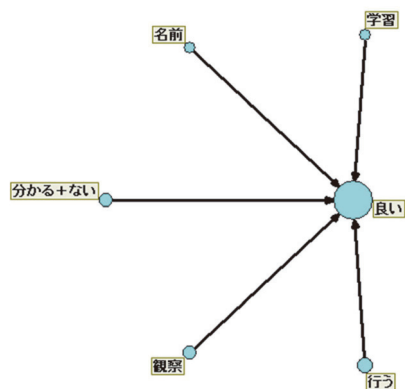


図4. 課題・方向性「ことばネットワーク (係り受け)」

表5. 課題・方向性「カテゴリとキーポイント」

カテゴリ (件数)	サブカテゴリ(件数) * 上位5位	キーポイント
良い(40)	課題の発見(2)	振り返りの必要性、良ところ悪いところの振り返りの必要性 良ところ悪いところの気づき
	役割の遂行(6)	サポート、サポートの効果、サポートの遂行 グループでの知識、計画の必要性 援助全体
	学び(3)	グループ学習の効果
	技術(33)	流れのスムーズさ 浮腫の見方、挿入物の確認(点滴、留置カテーテル、酸素吸入)、安楽な体位の選択、事前学習の必要性、血圧測定、報告の仕方、不足な技術の自覚、時間配分 事例に応じる必要性、聴診、音の区別の学習効果、氏名確認
行う(8)	技術(8)	確認し忘れ
		具体的な問診の仕方
		氏名確認忘れ
		声の調子を考える
		観察後の行動
		具体的な説明の必要性
		優先順位
		氏名の確認、観察の実践
分かる+ない(8)	計画的な実施、知識の蓄積(8)	酸素ボンベの扱い、報告の仕方、適切な体位、メンバーの共有
点(4)	良かった点(4)	氏名の確認、気づき、声かけ
観察(5)	サポート(2)	不足部分の指摘
	観察視点(3)	客観的な見方の必要性、チューブ類の観察
名前(3)	誤認の回避(3)	基本技術の継続

V. 考 察

1. 自己評価の「学習目標達成状況」

以下は、学習目標の構成要素の3構成に沿って考察した。

まず、「学習目標」では4項目「学習目標理解」「問診・視診」「報告・記録」「課題の明確化」は、すべて有意な差があり学生は「できる」と感じている。学習目標は学生の行動目標の指標となることから、「できる」と意識できることは自信につながっていく。「問診と視診」は、学生が患者の理解において最初に患者と向き合う瞬間である。患者理解のために積極的に関わっていると推測できる。「報告・記録」は、アセスメント力が基本となる。シミュレーションにおいて事例課題を中心として、個人課題やグループ課題に伴いアセスメントを繰り返しながら学習を進めていくことができ、理解につながっていると予測できる。「課題の明確化」は、シミュレーションの前・中・後の個人学習やグループ課題、報告、振り返りでの整理などを経て課題を明確にしている。有意な差が見られない、シミュレーション前・中の比較である「シミュレーション前熟考」「シミュレーション中熟考」は、事例について援助方法を考えて計画を立案している。しかし、シミュレーション中にはシミュレーション前と比較し十分に援助方法を考えられていない。これは、初めてのシミュレーションに対しての緊張や計画の不備などにおいて、思うように進めることができていると推測できる。

「事前学習」では、全2項目「グループ学習」「個人課題」において有意な差があり、個人及びグループ課題共に「できる」と感じている。事前学習は、個人学習とグループ学習があり、個人学習後にグループにてデブリーフィングを行っている。グループ学習を通して、個人学習では気づけなかったことや思考の確認などができていると学生は実感している。また、事前学習の重要性について、課題に関わりを通して考えることができると推測できる。一方、事前学習は事例を展開しており、事例はシミュレーションに必要な観察が求められている。そのために、「事例観察」「グループでの役割遂行」「シミュレーション熟考」に影響している。これらの実践「前・中」においてはいずれも実践「前」が実践「中」と比較しよくできていると感じていることは、シミュレーション中は計画通りにいかないことが多く、反省点が多かったことが予測できる。カテゴリ「時間」は事前学習のシミュレーション計画に影響したと推測され、サブカテゴリは「時間不足」「時間過剰」「時間配分」「手技不足」「優先順位」などからあげられる。したがって、事前学習の取り組みが満足できる結果であっても、実践とは結びつきにくいことも考慮し十分な準備を行うことについて指導が必要であることが示唆された。

「シミュレーション」は、事前学習において事例に基づいた演習計画が基盤となっている。9項目中3項目「シナリオの実施」「知識」「態度」は有意な差がある。「シナリオの実施」「態度」は「できた」という捉え方をし、「知識」については不足と感じている。「知識」では、フリー記述においても不足感をもっているが、グループ学習において新たに知識を補うことができ、学びが大きかったと推測できることからグループ学習の効果があると考えることができる。有意な差がみられないのは、「シミュレーション時間配分」と「技術」である。「シミュレーション時間配分」では、フリー記述においても重要な言葉として多く抽出されている。シナリオの計画を立案できたのみでなく、実践に通じる計画の見直しの必要性について実感している。「技術」においては実践の全てに影響を及ぼすために、日々の技術練習や技術練習に取り組む姿勢・意識の持ち方が関係してくると推測できる。そのためにシミュレーション学習は「時間配分」が重要であること、

時間内に行うためには看護技術が基本であることを認識できるよう指導が必要であることが示唆された。「態度」についてはシミュレーション学習において個人学習・グループ学習を経てシミュレーションの一連の流れに関わっていることに達成感をもっていることが予測される。

2. 振り返りレポートから見える学生の特徴

学習目標達成状況をカテゴリ化し、学生の思いや考えを整理した結果8カテゴリに分類されている。以下は、学習目標自己評価の結果を含み注目度の高いカテゴリについて考察した。

【患者】は、テキストマイニングの分析では「カテゴリ」中の上位に位置している。【患者】に対してのサブカテゴリは、『対応』『観察』『問診』『技術』『説明の仕方』について考えている。患者の個性性を捉えることを日々学びながら、患者への対応の仕方や事例に応じた観察の視点、問診の在り方それらに共通して、説明の仕方を振り返っていると推察できる。シミュレーション学習では、フィジカルアセスメントを通して根拠や効果についてアセスメントせざるを得ない状況で、患者の安全や安楽について学びがあったと推測する。また、係り受けことばネットワーク（＊話題の存在を示す）では、【患者】は重要な要素で中心的な単語の一つであり“目線、合わせる、寝たきり、状態”など、学生が患者の状況に適した対応を学んでいたことを表していると予測できる。

【時間】はサブカテゴリの中に5コードに含まれる。キーワードでは、“一部の不足”“一つに対しての時間超過”“スピード”など行動に対しての見直しの言葉が多い。シミュレーションは20分という枠の中で行われたことは、計画と実践とのイメージが結びついていかなかったことが予測される。「技術」は5コードのサブカテゴリに含まれ、また言葉として表現されていなくても全ての基本となることである。これらから、シミュレーション学習が看護技術に基づき実施されることは意識され、各自の課題につながっていていることが推測される。さらに、ことばネットワーク（係り受け）では「時間」は「正常」「看護師」「かかる」の単語と関連している。これらから、シミュレーション学習は「時間配分」と「看護技術」が重要であることが強調されている。

【良い】からは、個人課題やグループ課題は不足ながらもグループ学習において「不足に気づく」や「課題の明確化」などができており、学習は実施したという思いが感じられる。しかし、カテゴリ【心音】からは「判断できた」とある一方「音の区別の困難」「事例の誤解」などを感じてもおり学習の難しさも伺える。

以上、学習目標達成状況および振り返りレポートからみると、自己評価では「できる群」が多く、振り返りレポートを見てみると実践により「知識」「技術」「態度」に多くの気づきがあったことから、シミュレーション学習は達成感があった学習方法であることが推測される。しかし“必要な知識の深化と技術の獲得を実感したことが高い評価につながる⁸⁾”ことから、今後、1年次は看護実践のために多く技術練習と知識の蓄積が必要である。看護実践の構成要素⁹⁾は「知識」「技術」「態度」である。「できた」という実感から、さらに内容を深めていくことができるよう指導が必要であることが示唆された。しかし、学習目標達成に向けて自己評価を意識してシミュレーション学習に臨んだ姿勢が多くみられたことは、高く評価できると考える。

3. 課題・方向性

課題・方向性状況の単語頻出からは、「思う」「患者」のことばが多い。学生は、一連のシミュレーション学習を通して振り返りを行うことで、「課題」を明確にすることができている。学習目

標の「事前学習」では、実践の場面で「不足に気づく」「病態」「技術練習や基本技術の必要性」などがキーワードに上がっていた。これらは、自己の課題に影響を与える言葉となっていると考えられる。また、同じく「シミュレーション」では、A群（できる）分類に属しているが、“時間配分”に対しては計画の不足を感じている。カテゴリでは【良い】のキーポイントとして[技術]の中で、“流れのスムーズさ”“時間配分”を、【行う】のキーワードとしては[技術]の中で“優先順位”が上がっている。したがって、時間配分については話題語となりグループの問題として考えられ課題となっていると予測できる。また、一連の流れとして、【行う】は行動として問診の仕方、観察後の対応、話し方など技術として適切な在り方を課題としていることが伺える。【名前】は、基本技術のとして確認できていることを各自が評価している。最初の氏名確認ができたことが次の行動につながるという意味では、「できた」という思いになったと予測できる。課題としても継続していくことの必要であることをあげていると推測した。【観察】は、シミュレーション学習の基本となることであり“の必要性”から課題として挙げられていると推測できる。【分かる＋ない】は、今回の学習では不足部分の指摘や“客観的な見方レベルが高かったと考えることができる。しかし、学生は“物品の扱い方”や“報告の仕方”まで臨地実習では求められるため、シミュレーション学習で課題となっていたことに関しては積極的に関わっていくことが必要である。学生の課題となったことは、シミュレーション学習の主体的な学習の必要性につながっていくためにレベルとしては高いが、重要なことである。したがって、シミュレーション学習への組み込み方を工夫していくことが示唆された。【点】については、“よかった点”がキーワードにあげられている。これは、継続していくことの必要性があると予測できる。

以上から、課題については実践から学びが大きく、「よかったこと」も「できなかったこと」「不足なこと」も学びとして受け止めていることが分かった。学生は、シミュレーション学習の振り返りを真摯に受け止め課題につなげていることが分かり、「出来たことの継続」「計画的な行動の実施」「技術練習」「知識を身に付ける」などが課題としてあげられる。その指導としては学習意欲を低下させないような関わりが必要であることが示唆された。また、学習目標の自己評価によって自己の行動を意識付けて確認していくことがシミュレーションの指標となることから、自己評価は意義があることと推測できる。さらに、全身モデルを使用したシミュレーションは、リアルな患者設定のもと看護師としての役割と責任をもって実践できることから、欠かせない学習方法であると言える。

VI. 結 論

シミュレーション学習は、目標達成状況からみると自己評価が高く学習目標は達成感が見られる。一方、知識の不足感あり、シミュレーションの準備を十分に行う必要がある。振り返りレポートからは、時間配分や技術の不足などを実感し、技術練習による技術の蓄積やシミュレーションの準備の重要性について学びがあった。これらから、本学ではシミュレーション教育プログラムは、「患者把握のために必要な基礎看護技術を習得する」目的において学習効果があると言える。

謝 辞

本研究にご協力頂きました方々に深く感謝申し上げます。

研究助成情報

本研究は、平成30年度八戸学院大学特別研究費助成の助成を受けたものである。

引用文献

- 1) 糸嶺一郎 (2013). 新卒看護師のリアリティショックに関する研究の動向と課題 過去20年の文献から (原著論文). 茨城県立医療大学紀要 18. 1-13.
- 2) 日本看護協会 (2005). 2004新卒看護職員実態調査の早期離職等実態調査. 日本看護協会ホームページダウンロード2018.3.6付
- 3) 山田貴子, 藤内美保 (2015). 早期離職した病院勤務の新卒看護師の入職から退職後までの心理プロセス. 日本看護研究学会誌 38(5). 5.
- 4) 平成23年厚生労働. 看護教育の内容と方法に関する検討会報告書:「看護師に求められる実践能力を育成するための教育方法」. 厚生労働省ホームページダウンロード2018.3.6付
- 5) 岡山加奈ら (2012). 看護実践能力のための学士課程における看護基礎教育とその評価方法の構築に向けて (第2報)「呼吸を整える技術」における看護教育の現状と今後の課題. 岡山県立大学保健福祉学部紀要. 第19巻1号. 91-99.
- 6) 梶田叡一 (1999). 教育評価 (第2版). 東京:有斐閣双書. 186.
- 7) 阿部幸恵 (2013). 臨床実践力を育てる 看護のためのシミュレーション教育. 東京:医学書院. 89, 95.
- 8) 貞永千佳生ら (2014). 看護基礎教育における一次救命処置演習に対するシナリオを活用したシミュレーション教育の学習効果－一般病棟におけるチームでの対応を設定した試み－. 人間と科学 県立広島大学保健福祉学部誌14(1). 87-96.
- 9) ナーシンググラフィカ 基礎看護学③ 基礎看護技術 (2018). 株式会社メディカ出版第6版第2刷. 14.